発達心理学者の子育て奮戦記（4）

小さな反逆児

長田瑞恵

ことばの誕生

私の娘が初めて話した意味のあることば（初語）は「ワンワン（犬）」でした。一般的には初語が何であったかがよくわからないということも多いようですが、娘の場合は、ちょうど一歳を過ぎたある日、散歩中に犬を見て突然「ワンワン」と言うようになったので、それが初語だとはっきりとわかりました。

「カータン（お母さん）」という初語を期待していた私は少しがっかりしたものの、意味のあることばで娘とのコミュニケーションが成り立つようになったことを大変うれしく思いました。また、初語が「カータン」でも「トータン（お父さん）」でもなく、「ワンワン」だったことにおもしろさを感じました。というのも、娘が母親である私をよく見ているなあと感心したからです。私は犬が大好きです。そのため、娘との散歩中に犬とすれ違うと、「ほーら、ワンワンよー。ワンワン、かわいいねー」などと言いながら娘と一緒に犬を眺めて

いました。そのような経験を重ねていた娘は、初語が出たその日、私の大好きな犬を見つけて思わず「ワンワン」ということばが出たのだと思います。

子どもは周囲の大切な人のことをよく見ています。そして、大切な人が好きな物、嫌いな物を敏感に見分け、自分も大切な人と同じように振る舞うようになると言われています。娘の初語は、そのことを私に実感させてくれるものでした。

イヤイヤちゃん

ことばが出始めたころから娘のイヤイヤは徐々に現れ始め、一歳二か月を過ぎたころから本格的になっていきました。

最初に出たイヤイヤは食事のときでした。それまでは多少苦手な物でも口の中に入れてしまえば渋々食べていたのに、このころから嫌いな物はそのままべえーっと口から出すようになりました。一度、口から出すようになると、その後は頑として食べません。無理に食べさせようとしようものなら、あたり一面に食べ物を投げ散らかします。朝のばたばたしているときに散乱した食べ物を片づけながら、「また食べてくれなかった」という落胆と「忙しいのに投げ散らかすのだから」という少しだけ恨みがましい気持ちとが入り混じった複雑な思いに駆られました。

やがて食事の時間を皮切りに、娘のイヤイヤはあらゆる場面で顔を出すようになっていきました。手洗いがイヤ、歯磨きがイヤ、着替えがイヤ……。もっと幼いころにも着替えを嫌がることはありましたが、それは眠かったり体を拘束されることを嫌がったりといった単純な理由のことが多かったように思います。一方、最近のイヤイヤは、用意された靴下が気に入らなかったり、自分の好きな

場所に座って着替えたかったりといった、もっと複雑な理由であることが多くなってきました。そして理由が複雑になってきた分だけ、娘の要求が私にうまく伝わらず、ますますイヤイヤが激しくなってしまうということが増えてきました。

もちろん、すべてのイヤイヤがずっと続いているわけではありません。たとえば、食べたくない食べ物を床に投げ捨てるという実力行使はある時期に徐々に減っていきました。それは娘が首を横に振る動作を覚えたころでした。首を振ることで「いらない、食べたくない」という意思表示をすることができるようになり、自分の思いを親に伝えることができるとわかったのでしょう。また、「ダメ」「イヤ」といった拒否のことばをはじめ、さまざまな語彙が増え始めてきてからは、ただ泣きわめくだけではなく、親に自分の意思を伝えようとするような行動がますます増えてきました。

次第に食べたくない物を口から出すだけではなく、積極的に自分の食べたい物を指さしたり、ことばで伝えたりするようになってきました。

娘のイヤイヤには娘なりの気持ちが込められています。「反抗のための反抗」というようなイヤイヤすること自体が目的であると思われる場合もありますが、たいていはそれなりに思うところがあり、言いたいことがあるようです。そして、まだまだ充分ではない語彙を最大限に使って懸命にコミュニケーションを取ろうとしています。私はそんな娘の気持ちを受け止め、できるだけ娘の意図

を汲んで応じたいと思うのです。

しかし、そんな私の努力も常にうまくいくとは限りません。なかなか娘の意図が読み取れず、娘のイライラが高じてそれに私が巻き込まれているうちに、次第に娘自身も何に不満をもっていたのかがわからなくなってしまって、泣きわめくだけになってしまうこともあります。

鏡

私にとって子育ては、時として自分自身と向き合う瞬間でもあります。子育てには自分の価値観や歴史が知らず知らずのうちに反映されるように思います。そして、娘の様子は私の気持ちを映し出す鏡のように思えることがあります。私に気持ちの余裕があれば娘もゆったりと過ごしますし、私が参っているときには娘もどこかイライラとしてくるからです。

娘のイヤイヤが始まってから、育児日記には「深呼吸」「余裕をもって」といった自分自身に言い聞かせるような記述が登場するようになりました。そして娘についても、「母に余裕があるときは穏やか」といったような内容が書かれるようになりました。

ある程度年齢を重ねてから子どもに恵まれたこともあり、娘に対して深呼吸が必要なほど感情的に怒りたくなるということはそんなに多くありません。しかし、それでも時折、娘の行動を「腹立たしい」と感じる瞬間があります。娘のイヤイヤのほとんどは腹立たしくないのに、ある特定の場面、特定の行動に限って、とても腹立たしく感じることがあるのです。

そういうとき、怒りたい気持ちをぐっと飲み込み、息を吐き出しながら考えます。

「なぜ、私はこんなに腹立たしく感じるのか。ど

うして、この行動だけこんなに嫌なのか」

すると、いろいろなことが見えてくるような気がします。私が普段意識していない価値観、子ども観、娘に対する期待、自分に対する期待。そしてそれらを通してさらに見えてくるのは、自分の子どものころのことです。幼いころに親からしつけられ伝えられた「あるべき姿」や人間関係のとらえ方が、そこにあるような気がします。

自分の中のさまざまな価値観や基準が自覚されてくると、腹立たしく感じた娘の行動もそんなに目くじらたてるほどのことでもないと思えるようになることもあります。自分が無意識に「当たり前」と思っていたことも、本当に必然性が高いものは実はそんなに多くないからです。

しかし一方で、腹立たしく思う理由が自覚できても、なお、腹立たしさが消えないこともあります。そういうときは、私が友人から子育ての相談を受けるときに伝えることばを自分自身に言い聞かせます。

「子どものイヤイヤは成長の証。でも、母親だって人間なのだから、腹が立つのも当たり前」

このことばは気休めかもしれません。しかし、怒りにかられ、また、そんなふうに感情的になってしまう自分を受け入れられないために、子育てがつらくなってしまうお母さんたちも多いように思います。私も含めたそんなお母さんたちの気持ちが少しでも軽くなるように、時には「人間だから腹も立つさ」と気楽にいきたいと思うのです。そして、子どもの成長に喜びを感じつつも、イライラしてしまう不完全な自分を受け止めたいと思うのです。思いどおりにならない自分自身の気持ちを認めて許容することが、思いどおりにはならないことの連続である子育てを受け入れることにつながっていくように思います。

娘は一歳十一か月になります。今朝も、布団から出たくない、パジャマを脱ぎたくない、パンを食べたくない、チーズを食べたくない、手を拭きたくない、椅子から降りたくない、歯磨きをしたくない、靴下をはきたくない、シャツを着たくない、髪の毛を結いたくない、この上着よりもあちらの上着の方がよい……とひとしきりイヤイヤを連発してから保育園へと向かっていきました。朝のイヤイヤの原因のほとんどは、忙しく動き回る両親の気を引きたいからのようです。イヤイヤを適当に受け流そうとしようものなら、娘のつきつける難題はさらにエスカレートしていきます。そのため、一つ一つのイヤイヤをできるだけていねいに、しかしできるだけ要領よく受け止めていくように智恵をしぼります。まるで障害物競走をしながら出かける支度をするように、朝の時間はあっという間に過ぎていきます。

この小さな反逆児の行動の一つ一つは、娘が娘なりに世界を理解しようとし、人間関係を調整しようとし、自分のできることを試そうとしている証です。そして思う存分反抗できるのは、娘が私たち両親を信じて安心しているからなのだと思います。イヤイヤはしばらく続きそうですが、「これも今だけ」と楽しむくらいの気持ちで娘を見つめていきたいと思います。

（十文字学園女子大学　専門は認知発達。
主な著書『知識獲得過程についての理解の発達』
風間書房　二〇〇三）